



ここで分かれる堆肥の特徴と効果

●肥料効果には、プラスとマイナスがある

窒素とともに、C/N比に注目しましょう。C＝炭素は炭水化物の構成要素で、わらや落ち葉、おがくず、バークなど植物質を主原料とする堆肥は炭素が多く、C/N比が大きくなります。N＝窒素はたんぱく質の主な構成要素で、家畜糞や肉・魚の残さなど動物質を主原料とする堆肥は窒素が多く、C/N比が低くなります。

窒素が多めでC/N比が低い堆肥は「肥料効果型」の堆肥です。しかし、窒素が多すぎたりC/N比が低すぎたりすると、発芽時の濃度障害、細根・根毛など根の発達不良、土壌病害発生などの害が出ます。窒素が少なめでC/N比の高い堆肥は豊富な有機物＝植物繊維が分解して腐植ができ、これによる土の団粒化が進むため通気性・保水性が高まる「根づくり効果型」の堆肥です。しかし、C/N比が高すぎると、有機物分解のために土の中の窒素を消費してしまい、野菜の窒素不足、成長不良を招きます。

生ごみ堆肥は、原材料によって窒素が0.3%から3%以上までと10倍近い開きがあります。また、食べ残しや食品くずなどの有機物は、微生物による分解が早く、急速に「肥料効果」が現われますが、そのために濃度障害や窒素過剰による野菜の軟弱成長を招くことがあるので、注意が必要です。